

# 国際PRの成功－東京五輪招致－

PRコンサルタント 大津 彰裕

56年ぶりの第32回夏季オリンピック（20年）の東京への誘致成功は、日本がこれまで苦手としてきた国際PRの一  
大成功事例となった。

この成功が残した教訓は、①主催都市、政府、政界、財界、皇室、民間とオール・ジャパンの力を結集する②技術的  
的には全ての力を統括して具体的な戦術を練る「司令塔」を持つ③その理念を明確にしてプレゼンテーションに当た  
ることだった。

すべては、09年10月、16年夏季五輪の招致に、東京が失敗した反省から始まった。この時は、マドリード、シカゴ  
ら4都市と競い、「南米初開催」の旗印を掲げたリオデジャネイロ（ブラジル）に決まった。1988年の名古屋、08年  
の大坂に次ぐ3連敗で、日本スポーツ界の外交力が問われた。

IOC総会が開かれたのは、自民党から民主党への政権交代があった1か月後で、オール・ジャパンの結成どころで  
はなかった。「なぜ東京で開くのか」という理念も明確に示せず、旗幟鮮明なリオ、さらにマドリードの後塵も挾  
いた。

今回は終盤、スペインのフェリペ皇太子の健闘に対抗して、皇族の政治利用を渋る宮内庁の抵抗を押し切って、ス  
ポーツ界に知人が多い高松宮妃久子さまの出席が実現、皇族を含む「チーム・ジャパン」が実現した。

## 目立った司令塔の活躍

久子さまは、総会への正式プレゼンの一番手として、英仏語を使って、見事にIOC委員の心に食い込んだ。この裏  
には、プーチン首相との会談を通じてロシアのIOC委員3人の支持を取り付け、集票にも尽力した安倍首相らの意向  
があったと見られている。

再招致に名乗りを挙げた石原慎太郎前知事を引き継いだ猪瀬都知事は、ニューヨークタイムズ紙とのインタビュー  
で、「イスラム教国はけんかばかりしている」と、競合都市との批判や比較を禁ずるIOC規則に違反する失言をし、物  
議をかもした。しかし、就任直後から五輪を「都政最大のテーマ」と位置づけ、誘致運動の最中に、愛妻の死に直面  
しながら、スポーツマン知事として、どこでも趣味のジョギングを披露するなど、涙ぐましい努力を重ねPRに努めた。

この首相一都知事の政治家ラインに、昨年7月、日本で唯一のIOC委員になり、招致委員会理事長になった竹田恒  
氏が加わり、司令塔の形ができた。竹田氏は旧皇族竹田宮の3男。馬術選手として五輪出場2度の経験を持つ。そ  
の人脈を生かして、当時、次期IOC会長選の有力候補で、今度の総会で会長に選出されたドイツのトマス・バッハ副  
会長に接近するなど、集票に大きく貢献した。

最後までぐらつき、日本の泣き所だった理念（開催理由）は、「スポーツの力の素晴らしさ」に落ち着き、各プレゼ  
ンターの努力でそれなりに評価された。

土壇場になって日本誘致に立ちはだかった原発の汚染水流出問題では、安倍首相は総会で「状況は完全にコント  
ロールされており、影響は原発の湾内にロックされている」と言い切った。この国際公約を守れるかを世界が見  
守っている。

## 筆者紹介



大津彰裕（あおつ・よしひろ）

東京教育大学卒。昭和37年読売新聞社入社。社会部・外報部・解説部記者を経て、共同PR社  
顧問。現在、PRコンサルタント。慶應、玉川、相模女子大学非常勤講師を歴任。「ブランド  
は広告でつくれない（翔泳社、共訳）」など著訳書多数。